

「大衆文化と高校野球」

—神奈川の高校野球を題材とした授業実践—

厚木王子高校 時任 竜也

はじめに

今回、このような授業を構想した理由は、高校野球（とりわけ甲子園大会）が「国民的行事」のように多くの人々の関心を集めるようになってきていることに疑問を抱いたからである。高校野球が甲子園球場で開催されるようになったのが、1924（大正13）年からであり、「高等学校学習指導要領 平成30年告示 地理歴史編」（以下、学習指導要領とする）の歴史総合では、「C 国際秩序の変化や大衆化と私たち」の「(2) 第一次世界大戦と大衆社会」に該当する。以下は、当該部分の説明である。

大量消費社会と大衆文化については、欧米では19世紀後半から進んでいた第二次産業革命や科学技術の革新の流れが第一次世界大戦を機に一層加速し、産業構造の変化、大量生産・大量消費社会の到来、都市化の進行をもたらしたことなどについて扱う。さらに、このことを背景に、アメリカ的な生活様式や価値観の影響などから商業主義的な大衆文化が生まれたり、耐久消費財の発達を背景に近代的、合理的な生活様式が取り入れられたりしたことに触れ、生活の平準化・画一化が進んだことに気付くようにする。

私は、学習指導要領における「商業主義的な大衆文化」という部分に着目し、高校野球が大衆文化に、どのような影響を与え、また多くの人々の関心を集めるようになった部分を授業で表現していきたいと考えている。この部分で着目したいのは、高校野球と新聞やラジオなどのマスメディアとの関係性について見ていきたい。さらに、日本史研究推進委員会のテーマである「神奈川の地域史研究とその教材化—歴史総合・日本史探究をどう教えるか—」に関連し、神奈川の高校野球の歴史を盛り込みながら授業を展開していきたい。

1 本校の授業形式

厚木王子高校（以下、本校）は、2024年4月に厚木東高校と厚木商業高校が統合して開校した学校であり、普通科（5クラス）と総合ビジネス科（4クラス）に学科が分かれている。私は2学年の担当であったので、歴史総合の授業を担当した。

本校の歴史総合は、普通科が文系クラスで週4時間、理系クラスで週2時間授業を行い、総合ビジネス科が週2時間授業を行う。また、採択している教科書も異なるため令和6年度は、文系クラスでは「グローバル化と私たち」まで進み、総合ビジネス科では「国際秩序の変化や大衆化と私たち」まで進んだ。

今回は、総合ビジネス科のあるクラスで行った授業実践とそれを受けた成果と課題、今後の展望について論じていきたい。

2 実際の授業

導入では、今回の選抜甲子園大会に 21 世紀枠で出場する県立横浜清陵高校のニュースを取り上げた後、「神奈川の県立高校が選抜大会に出場したのは何年ぶりか」というクイズを出題した。クイズの解説で県立高校の甲子園大会が 71 年ぶり（春の選抜大会は 1954 年の県立湘南高校以来、夏の大会は 1951 年の県立希望が丘高校以来）であることを伝え、さらに甲子園大会の優勝回数が全国で 3 番目に多いことを示した。そして、本時の目標である「なぜ、私たちは高校野球に興味・関心があるのだろうか」という問いについて、生徒に予想させた。

展開の部分は、①と②で取り上げる内容を精選した。展開①では、東京朝日新聞（以下、東京朝日）が 1911 年秋に発表したことで広まった「野球害毒論争」と新聞社などの主催による野球大会の開催について取り上げた。この部分で生徒には、東京朝日と大阪朝日新聞（以下、大阪朝日）の編集内容の相違（野球排撃論を展開する東京朝日と学生野球に対して擁護論的立場をとっていた大阪朝日）や論争の中で野球熱が過熱し、新聞社などの主催による野球大会が開催されていることに触れる。

ここでは、新聞記事の引用や高校野球のメディアでの取り上げられ方などをロイロノートで示し、同じ新聞社でも野球に対する扱いの違いや地方での大会の取り上げ方について考えさせる。その後の解説にて、東京朝日と大阪朝日が別々の会社であったことや高校野球の人気の新聞社主催による野球大会の開催（1924 年に選抜大会が大阪毎日新聞の主催で始まっている）されたことや甲子園球場の開場、日本放送協会（NHK）によるラジオ放送の開始により、人気が高まったことを示した。

展開②では、甲子園大会の出場校に着目して「1930 年代の甲子園大会に参加している地域の特徴についてまとめよう」というワークを行った。ここでは、夏の甲子園大会に台湾や朝鮮、満洲の学校が出場していることを気付かせると同時に野球を通じて、日本の支配下や勢力下であった地域にも野球が浸透していることを示した。

実際、朝鮮では 1899 年に仁川で日本人が野球をしていたことが確認されている。また、1913 年には朝鮮総督府の御用新聞社である京城日報社の主催で全鮮野球大会が開催された。朝鮮で全国中等学校優勝野球大会の地区予選が始まったのは 1921 年からであったが、21 年と 22 年は、日本人チームの学校が出場していた。

次に台湾では、2015 年に台湾映画「KANO 1931 海の向こうの甲子園」が日本で公開され、戦前の甲子園に台湾代表が出場していたことは広く知られるようになった。1897 年頃、台湾に野球が伝わり、台湾代表が全国中等学校優勝野球大会へ出場するようになったのは、1923 年からであった。一方、満洲で野球が始まったのは 1908 年からと台湾よりも遅く、予選に参加した学校も 3 校程度にとどまっていた。

台湾予選参加校…台北商・台北工・台北一中・台南一中・高雄中・台中商・嘉義農林・台中一中・台中二師範・台中二中・嘉義中・国民中・花蓮港中

満洲予選参加校…旅順中・大連商・南満工・奉天中・長春商・青島中・安東中・撫順中・新京商・奉天商・天津商

まとめの部分では、導入で予想してもらった「なぜ、私たちは高校野球に興味・関心があるのだろうか」という問いについて、授業の内容を踏まえたうえで再度まとめさせた。

今回、授業を通して気付かせたかったメディアによる高校野球の広がりや大衆文化との関連性を記述できた生徒が何名かいたので、数少ない情報の中から読み解けた部分は評価できるかなと感じた。しかしながら、授業時間がややオーバーしてしまい、じっくりとまとめや振り返りに時間を割くことができなかつたのが悔やまれる点であった。

おわりに

この授業の成果としては、「高校野球」を題材とした切り口が大衆スポーツの観点からとても面白いとの評価を受けた。また、私自身も教材を調べるにつれ、高校野球が「大衆化」という時代において人気が高まり、今の大学野球やプロ野球にも繋がっていったことを知ることができた。

一方、課題としては、今回のテーマが「大衆化」を着目した問いであったのか、生徒への「時代感覚」を提示できていたのか、そもそものテーマと今回の問いが噛み合っていたのかなどが挙げられた。また、授業を通じて感じたことは、授業を行ったクラスの生徒の高校野球に対する興味・関心が私の想像以上に低かった点が浮き彫りとなった。ただ、高校野球にピックアップするのではなく、先程も記した「時代感覚」の提示をしたうえで授業を行えると、生徒もやりやすい内容だったのかなと感じた。

そして、一番痛感したのは、歴史総合や日本史探究の視点から見ると、この授業を通じ、さらに高度な問いを生徒に投げかけることも出来たのではないかという意見もいただいた。具体的には、マスコミやメディアとの関わり方や「大衆化」や「大衆文化」とはどんな時代だったかなど自分の考えを深化させる問いづくりをしていく必要があると感じた。

《参考文献》

- 有山輝雄『甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』 1997年 吉川弘文館
- 石坂友司「野球害毒論争(1911年)再考 「教育論争」としての可能性を手がかりとして」
『スポーツ社会学研究』第11巻 2003年 日本スポーツ社会学会
- 神奈川新聞運動部『熱球伝説 かながわ高校野球史』 1990年 かもめ文庫
- 木原資裕・榎木雄介「メディアの中の甲子園・高校野球 新聞・テレビの報道量を中心に」
『鳴門教育大学研究紀要』第27巻 2012年 鳴門教育大学
- 白川哲夫・谷川穰『「甲子園」の眺め方 歴史としての高校野球』 2018年 小さ子社
- 中村哲也『近代日本の中等高等教育と学生野球の自治』 2009年 一橋大学社会学研究科博士論文
- 秦真人・加賀秀雄「1911年における野球論争の実証的研究(Ⅰ)(Ⅱ)」
『総合保健体育科学』第14巻1号 1991年 名古屋大学総合保健体育科学センター
- 秦真人・加賀秀雄「1911年における野球論争の実証的研究(Ⅲ)」
『総合保健体育科学』第15巻1号 1992年 名古屋大学総合保健体育科学センター
- 森岡浩『高校野球100年史』 2015年 東京堂出版

●今日のテーマについて、自分なりに予想を立ててみよう

全国的に見て新聞などで取り上げられることが多く、人の目に入っているから、自然と興味関心を持つ。

●今日のテーマについて、自分なりに予想を立ててみよう

野球というスポーツは日本人の中の身近なスポーツだから。
高校くらいはほぼ全員がプレーをしていて元気をもらっているから。

資料1（上）・資料2（下） 実際に生徒が予想した回答

資料Ⅰ いずれも東京朝日新聞より

「野球は練習に長い時間を費すので自然に学課の方が御留守になる」

「対校試合杯を遣つて野球に熱中して来ると総ての挙動が粗暴になつて来るのみならず品性が劣等になる」

「心身共に発達する時期に野球の如き運動をさすと体格を滅茶々に壊してしまう」

「此処に最も憂ふべきことは私立は勿論の事官公立の学校と雖も選手の試験に手加減をすることがあり得ることである」

「学生が入場料を取つて試合を公衆に見せる、誰にでも聞いて見よ善い事だと云ふものは凡そ一人もあるまい」

資料Ⅰ いずれも東京朝日新聞より

「選手は皆金満家の子弟許りで金で遣つて落第しても構はぬ者のみではない」

「選手制度は野球技の発達には効力があるかも知れないが選手自身の放縦ならしめ、学科の豫習復習を怠らしめ終には学科が出来ぬ、只見物し得るのみだ、徒らに強い選手を作らうとする弊害は学生運動の本旨を忘るゝに至つた」

「抑私立学校は何故に野球を奨励するか、云ふまでもなく学校広告である早慶の学校経営者は（中略）良き選手が地方で卒業すれば争うて自校へ入れよと運動するに至つた」

「野球は目下余りに勝負に重きを置く為には体育の目的からは遠ざかり学生風教上の大問題となつて居る」

資料Ⅱ 大阪朝日新聞より

「私は野球は外国人と交際を結ぶに好都合なものであると思ふ（中略）此の間も米国のエール、ハアバートの両大学生は渡英してケンブリツヂ、オクスフォード両大学生と競技をやつた我が国の早稲田、慶応両大学生が野球を以つて渡米したごとく野球を仲介とし彼我の關係をして親密にせしむる効能があると思ふ」

資料3（左上）・資料4（右上） 東京朝日新聞の記事
資料5（下） 大阪朝日新聞の記事

表 朝鮮地区予選の参加校数と優勝チーム

年度	日本人	朝鮮人	混合	合計	地区優勝校	本選の成績
1921年	4	0	0	4	釜山商業学校	二回戦敗退
1922年	5	0	0	5	京城中学校	初戦敗退
1923年	7	1	0	8	徽文高等普通学校 ^a	準々決勝敗退
1924年	5	1	0	6	京城中学校	初戦敗退
1925年	6	1	0	7	釜山中学校	二回戦敗退
1926年	9	1	0	10	京城中学校	二回戦敗退
1927年	8	3	2	13	京城中学校	初戦敗退
1928年	10	4	4	18	京城中学校	二回戦敗退
1929年	12	4	5	21	平壤中学校	二回戦敗退
1930年	13	3	10	26	大邱商業学校*	二回戦敗退
1931年	16	9	10	35	京城商業学校	二回戦敗退
1932年	16	9	8	33	平壤中学校*	初戦敗退
1933年	12	8	11	31	善隣商業学校*	初戦敗退
1934年	14	8	12	34	京城商業学校	準々決勝敗退
1935年	13	8	12	33	新義州商業学校*	二回戦敗退
1936年	12	14	12	38	仁川商業学校*	二回戦敗退
1937年	12	11	13	36	龍山中学校	初戦敗退
1938年	10	8	13	31	仁川商業学校*	二回戦敗退
1939年	7	9	10	26	仁川商業学校*	初戦敗退
1940年	8	8	12	28	平壤第一中学校	二回戦敗退

注記：地区優勝校のうち、☆は朝鮮人チーム、★は混合チームを指す
 出典：小野啓照『帝国日本と朝鮮野球—権威とナショナリズムの闘争』（中央公論新社、2017年）、237頁

年度（大会回数）	参加校	代表校	全国大会成績
1923年（第9回）	4校	台北一中	1回戦
1924年（第10回）	4校	台北商	2回戦
1925年（第11回）	4校	台北工	1回戦
1926年（第12回）	6校	台北商	2回戦（初戦）
1927年（第13回）	6校	台北商	2回戦（初戦）
1928年（第14回）	7校	台北工	ベスト8
1929年（第15回）	7校	台北一中	ベスト4
1930年（第16回）	8校	台北一中	2回戦（初戦）
1931年（第17回）	11校	嘉義農林	準優勝
1932年（第18回）	12校	台北工	2回戦（初戦）
1933年（第19回）	11校	嘉義農林	2回戦（初戦）
1934年（第20回）	12校	台北商	1回戦
1935年（第21回）	12校	嘉義農林	ベスト8
1936年（第22回）	12校	嘉義農林	2回戦
1937年（第23回）	10校	嘉義中	ベスト8
1938年（第24回）	11校	台北一中	1回戦
1939年（第25回）	13校	嘉義中	1回戦
1940年（第26回）	13校	台北一中	2回戦（初戦）
1941年（第27回）	12校	嘉義中	中止

年度（大会回数）	参加校	代表校	全国大会成績
1921年（第7回）	3校	大連商	ベスト4
1922年（第8回）	3校	南満工	1回戦
1923年（第9回）	3校	大連商	1回戦
1924年（第10回）	4校	大連商	ベスト4
1925年（第11回）	1校	大連商	ベスト4
1926年（第12回）	3校	大連商	準優勝
1927年（第13回）	3校	大連商	1回戦
1928年（第14回）	3校	大連商	1回戦
1929年（第15回）	5校	青島中	1回戦
1930年（第16回）	5校	大連商	ベスト8
1931年（第17回）	5校	大連商	2回戦（初戦）
1932年（第18回）	4校	大連商	1回戦
1933年（第19回）	4校	大連商	1回戦
1934年（第20回）	2校	大連商	2回戦（初戦）
1935年（第21回）	3校	青島中	1回戦
1936年（第22回）	3校	青島中	2回戦（初戦）
1937年（第23回）	2校	青島中	2回戦（初戦）
1938年（第24回）	2校	天津商	1回戦
1939年（第25回）	4校	天津商	1回戦
1940年（第26回）	3校	奉天商	1回戦
1941年（第27回）	3校	天津商	中止

資料6（左上） 朝鮮の甲子園出場校・資料7（右上） 台湾の甲子園出場校
 資料8（下） 満洲の甲子園出場校

自分自身甲子園を昔よくテレビで見ていて、高校野球の歴史などを意識することはなかったけれど、今回の授業で高校野球についての歴史、社会の印象などを知って、今でこそ夏の風物詩である甲子園がこのような歴史を辿って来たことを知って驚いた。

いつの時代も、新しいものが導入されたときには賛否両論で、主張のぶつかり合いが過激化するものなのだと感じた。

当初は否定的な風潮もある中で、現在のように広く支持されるようになるまでにどのような歴史を辿ってきたのか興味を湧いた。

高校野球と大衆文化

〈振り返り〉

高校野球は戦後に、日本の大衆文化として定着し、甲子園大会は多くの人々に感動を与えてきた事や、各地域の代表校を応援する文化も根付いたり、スポーツを通じた一体感を生み出している事が現在の高校野球への興味や関心へと繋がっているのだと、今回の授業で分かりました。

資料9～11 授業後の振り返り